



反義語における語彙的対称性の破れ

陳, 奕廷

(Citation)

神戸言語学論叢, 11:1-13

(Issue Date)

2018-03-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010267>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010267>



反義語における語彙的対称性の破れ

陳 奕廷

三重大学

1. はじめに

本稿は「損」と「得」のような反義語だとされるものが、それぞれ「働き損」と「やり得」のように、複合語の一部として埋め込まれた形になった際に生じる非対称性を指摘する。2 節において反義語に関する先行研究を紹介し、特に「対称性」という概念に着目する。そして、3 節で「語彙的対称性の破れ」という原則が存在する仮説を立て、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」のデータを用いて検証する。その上で、4 節では「拘束意味 (bound meaning)」と「語彙化 (lexicalization)」という観点からこのような非対称性を説明する。5 節で結論と今後の課題を述べる。

2. 先行研究

反義語についての従来の研究は、タイプ分けを中心に論じてきた構造意味論的な研究 (Lyons 1968, Leech 1974 など)、テキストにおける高い共起性に着目したコーパス言語学的な研究 (Justeson and Katz 1991, Mettinger 1994, Jones 2002)、そして、近年では認知的な観点からの研究 (Cruse 1986, Croft and Cruse 2004, Paradis 2001, 松本 2007a, 2007b など) がある。そのなかで、Croft and Cruse (2004) は反義語らしさには程度性があると主張し、その程度を決める要因の 1 つとして「対称性 (symmetry)」を挙げている。それによると、英語の *large* と *tiny* のペアが *large* と *small* のペアよりも反義語の程度が低いのは、図 1 のように、大きさの尺度において対称的な位置から遠いからだという。

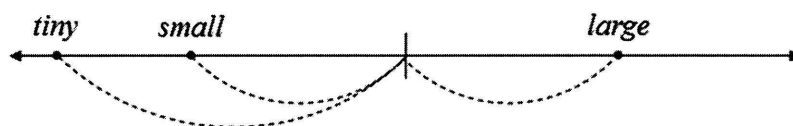


図 1 大きさの尺度における対称性

この対称性という概念について、Paradis et al. (2015) は *thick* と *thin* のような 21 の英語形容詞の反義語ペアを対象に、コーパスに基づくコレスポンデンス分析を行った。反義語形容詞の対称性をはかる際の具体的な基準としては、1) 形容詞が段階的なものかどうか、2)

形容詞用法か述語用法か (例: *the new hat* と *the hat is new*)、3) どのような意味タイプの名詞を修飾しているのか、4) 具体的な意味か抽象的な意味か、という 4 つを挙げている。2 つの語がこれらの基準において同じタイプに分類される場合は対称的で、そうでない場合は非対称的だとしている。この中で、名詞の意味タイプは表 1 のように、その意味の抽象度によって、3 つのタイプに分類されている (Paradis 2005 も参照)。1st order meanings の場合は具体物や音、映像のような抽象度が最も低いもので、2nd order meanings は時間的な展開を持つ事象と状態が含まれ、3rd order meanings は抽象的な概念が含まれる (本論文は 3 節において、このような名詞の意味タイプに基づき、反義語の機能的な対称性を検証する)。

表 1 名詞の意味タイプ (Paradis et al. 2015: 164)

1st order meanings	2nd order meanings	3rd order meanings
animal, people, plant, artefact, natural object, location, substance, sound, vision	Event: destruction, death, victory Activity/process: jog, bake, discussion State: happiness, sadness, pain, smell, taste	fact, system, thing, point, linguistics, question, knowledge, science, context, area, degree amount, year, day, autumn

Paradis et al. (2015) はこれらの基準に基づいてコーパスのデータを分類し、コレスポンデンス分析を行った結果、反義語ペアの用法パターンが高い対称性を持つことを実証的に示した。

3. 語彙的対称性の破れ

先行研究で述べているように、対称性を有することが反義語の大きな特徴である。しかし、反義語は複合語に埋め込まれるとその対称性が低下する、という現象が見られる。

例えば、「V-損」と「V-得」について、BCCWJ を中納言で検索してみると、その結合パターンは表 2 のようである。

表 2 「V-損」と「V-得」の結合パターン

「V-損」	育て損、働き損、払い損、預かり損、骨折り損、やられ損、取られ損、書かれ損、切られ損、撥ねられ損、事故られ損
「V-得」	やり得、書き得、もらい得、訴え得

この結果を見ると、「V-損」は「払い損」や「働き損」、「やられ損」、「切られ損」のように、V の空きスロットに動詞または動詞の受身形が入るが、「V-得」のほうは「やり得」、「書き得」、「もらい得」、「訴え得」しかなく、動詞の受身形が存在しない。

「損」と「得」が単独で使用されるときは (1) のように、ともに動詞の受身形と問題なく共起できるが、複合語の一部に埋め込まれると両者に非対称性が生じる。

- (1) a. 無駄な税金を取られるのは損だ。 (「取られ損」)
- b. 週刊誌にあれこれ書かれるのは損だ。 (「書かれ損」)
- c. 若く見られるのは得だ。 (「*見られ得」)
- d. 先輩から可愛がられるのは得だ。 (「*可愛がられ得」)

4.1 節で述べるように、(1) の例は「損」と「得」の意味が複合語の一部になったときに変化したものである。しかし、意味の変化を伴わなくとも、複合語になると非対称的になることが多くある。例えば、「始まる」と「終わる」、「始める」と「終わる」は単独で使用されるとき、それぞれの用法パターンが対称的である。

- (2) a. レースが {始まる／終わる}。
- b. *食事を {始まる／終わる}。
- (3) a. 食事を {始める／終わる}。
- b. *レースが {始める／終わる}。

しかし、複合動詞の一部になると、「*V-始まる」は存在せず、「V-始める」しかない。

- (4) a. *走り始まる／走り終わる
- b. *食べ始まる／食べ終わる
- (5) a. 走り始める／走り終わる
- b. 食べ始める／食べ終わる

また、(6) のように、「始まる／始める」と「終わる／終わる」は単独使用のとき、開始も終了も言及できるのに対し、複合動詞になると、生活期間の終了を表すことができなくなる。

- (6) a. 日本での暮らしが {始まる／終わる}。
- b. 日本で {暮らし始める／*暮らし終わる／*暮らし終わる}。

(6) のような例に見られる非対称性は、意味が変化したことによって生じたものではなく、4.2 節で述べるように、「語彙化」という現象における制約によってもたらされたものである。

る。

複合形式の反義語の非対称性はそのタイプ頻度の違いにも反映される。例えば、「Nー売り」は「花売り」や「店売り」のように 258 語あるのに対し、「Nー買い」は「箱買い」や「大人買い」など、合計 133 語に止まる。このような数の非対称性は「Nー貸し (61 語)」と「Nー借り (12 語)」、「Nー上げ (89 語)」と「Nー下げ (20 語)」などにも見られる (BCCWJ を中納言で検索した結果と BCCWJ の短単位語彙表にリストしてあるものの合計)。¹

表 3 複合語に埋め込まれた反義語の数的な非対称性

複合語	例
Nー売り	花売り、ドル売り、身売り、菓売り、魚売り、鮎売り、油売り、酒売り、豆腐売り、新聞売り店売り、店頭売り、駅売り、卸売り、前売り、別売り、空売り、ばら売り、確定売り、失望売り など 258 語
Nー買い	箱買い、桶買い、大人買い、衝動買い、ジャケ買い、信用買い、青田買い、人買い、馬買い、ドル買い、円買い、株買い、先物買い など 133 語
Nー貸し	高利貸し、金貸し、名義貸し、時間貸し、玉貸し、場所貸し など 61 語
Nー借り	名義借り、部屋借り、宿借り、賃借り、店借り など 12 語
Nー上げ	値上げ、かさ上げ、底上げ、賃上げ、レベル上げ、スキル上げ、金利上げ、棚上げ、半音上げ、足上げ など 89 語
Nー下げ	値下げ、格下げ、利下げ、賃下げ、料金下げ など 20 語

これらの言語事実から、本研究は以下のような原則が存在するという仮説を立てる。

(7) 語彙的対称性の破れの原則：

ある典型的な反義語のペア $[X]_{\text{word}}$ と $[Y]_{\text{word}}$ は、それぞれが $[[-X]_{\text{word}}$ と $[[-Y]_{\text{word}}$ や $[X-[]_{\text{word}}$ と $[Y-[]_{\text{word}}$ のように複合語の一部になると、対称性が低下する。

ここでいう対称性は、ある用法が可能かどうかによって判断される機能的なものである (例えば「損」と「得」における受身形との共起)。

本研究はこの語彙的対称性の破れの原則を検証するために、反義語ペアの単独用法の場合と、複合語に埋め込まれた場合の機能的な対称性を、BCCWJ のデータに基づいて考察する。反義語ペアの選定においては、客観性を確保するために、松本 (2007b) のデータに基づく。松本 (2007b) は反義語には程度性があることを主張し、56 名の大学生・大学院生に対してアンケート調査を行い、138 の調査単語ペアの反義性の程度を 5 段階 (0~4) で評価してもらうことで、反義語らしさを数値化した。その研究では反義語を空間的方向性、変化の方向性、スケール方向性、関係性の方向性という 4 つのタイプに分類している。本

稿では松本 (2007b: 186-187) が挙げている各タイプのペアの中で、一定数の複合語を形成するものから、反義性の程度が最も高い「上げる」「下げる」(空間的方向性。反義性のスコア 3.64)²、「始まる」「終わる」(変化の方向性。3.50)、「田舎」「都会」(スケールの方向性。3.17)、「売る」「買う」(関係性の方向性。3.38) を研究対象とする。

単独用法と複合語の機能的な対称性を検証するために、表すことができる機能がより限定されている複合語を基準に分析対象を設定する。研究対象の中で、「売る」「買う」のペアの複合語形式「N-売り」「N-買い」³は共起する名詞 N との意味関係が多様であるため、ほかのペアと別に扱う。「N-売り」「N-買い」における N または複合語全体が表すことのできる意味は、＜行為の対象＞、＜行為を行う場所＞、＜行為を行う際の様態＞、＜行為を行う原因＞、＜行為を行う行為者 (複合語全体が表す意味) ＞である。これらの意味に対応する単独用法の形式は「N を {売る／買う}」: <対象>、「N で {売る／買う}」: <場所、様態、原因>、「～を {売る／買う} N」: <行為者> となる。本研究は中納言を用いて、短単位検索で「名詞 N + {を／で} + {売る／買う}」と「を + {売る／買う} + 名詞 N」という組み合わせと「N-売り」「N-買い」を BCCWJ から抽出した (複合語の場合は 1 つの語として登録されている場合もあるため、BCCWJ の短単位語彙表データに収録されている「N-売り」「N-買い」も分析データに加えている)。⁴

まず、反義語「売る」と「買う」の単独用法において、共起する N のタイプとそのトークン数は表 4 のようである。表における比率は「売る」や「買う」の全用例のなかで、それぞれの用法が占める割合を示している (「売る」は全 9000 例、「買う」は全 27664 例)。

表 4 「売る」と「買う」と共起する N のタイプとトークン数

「売る」の単独用法において共起する N の形式と意味	トークン数	比率 (%)	「買う」の単独用法において共起する N が表す意味	トークン数	比率 (%)
N を売る <対象>	2002	22.24	N を買う <対象>	8230	29.74
N で売る <場所>	589	6.54	N で買う <場所>	1154	4.17
N で売る <様態>	567	6.3	N で買う <様態>	1241	4.48
N で売る <原因>	16	0.17	N で買う <原因>	85	0.3
を売る N <行為者>	79	0.87	を買う N <行為者>	107	0.38

図 2 のようにグラフで示すと、「売る」「買う」は単独用法において、それぞれの用法の比率でそれほど大きな差がなく、対称的だということがわかる。

反義語における語彙的対称性の破れ

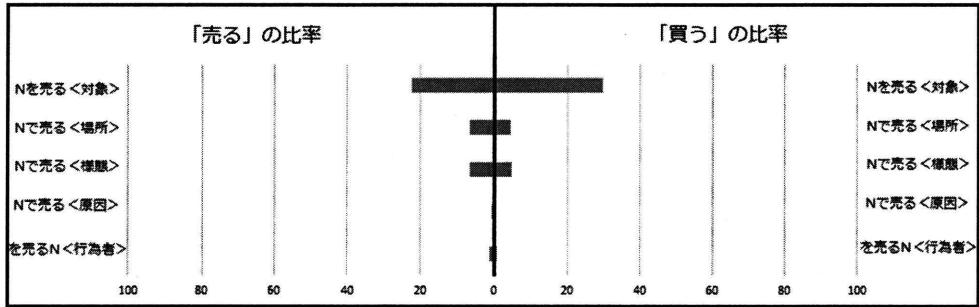


図2 「売る」と「買う」の機能的な対称性

一方、「N－売り」と「N－買い」におけるNの分布は表5のようである。

表5 「N－売り」と「N－買い」におけるNのタイプとトークン数

複合語「N－売り」におけるNが表す意味	トークン数	比率(%)	複合語「N－買い」におけるNが表す意味	トークン数	比率(%)
<対象>	268	8.59	<対象>	243	39
<場所>	55	1.76	<場所>	0	0
<様態>	2283	73.24	<様態>	270	43.33
<原因>	7	0.22	<原因>	77	12.35
<行為者> ⁵	504	16.16	<行為者>	33	5.29

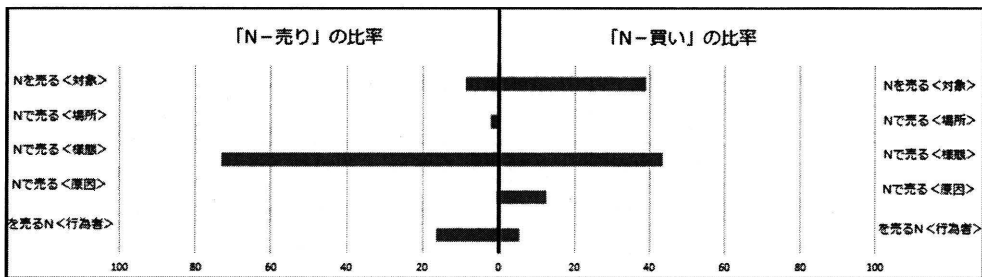


図3 「N－売り」と「N－買い」の機能的な対称性

図3が示すように、「N－売り」と「N－買い」のそれぞれの用法において、大きな違いがあり、対称性が低下していることが確認できる (Nが場所を表す場合においては複合語のほうが差が少ないが、「N(場所)－買い」はそもそも存在しない)。

「売る」「買う」とは異なり、「上げる」「下げる」、「始まる」「終わる」、「田舎」「都会」の場合、複合語におけるNとの意味関係は限定的である。「N上げ」「N下げ」は「Nを上げる」「Nを下げる」に言い換えることができ、同様に、「N始まり」「N終わり」は「Nが始まる」「Nが終わる」、「田舎N」「都会N」は「田舎のN」「都会のN」に言い換えること

が可能である。これらの表現を対象に、共起する N の意味タイプを 2 節で取り上げた Paradis (2005)、Paradis et al. (2015) の名詞の意味タイプに基づいて分類した。その結果が以下のようである (グラフにおける横棒の数字はトークン数を表す)。

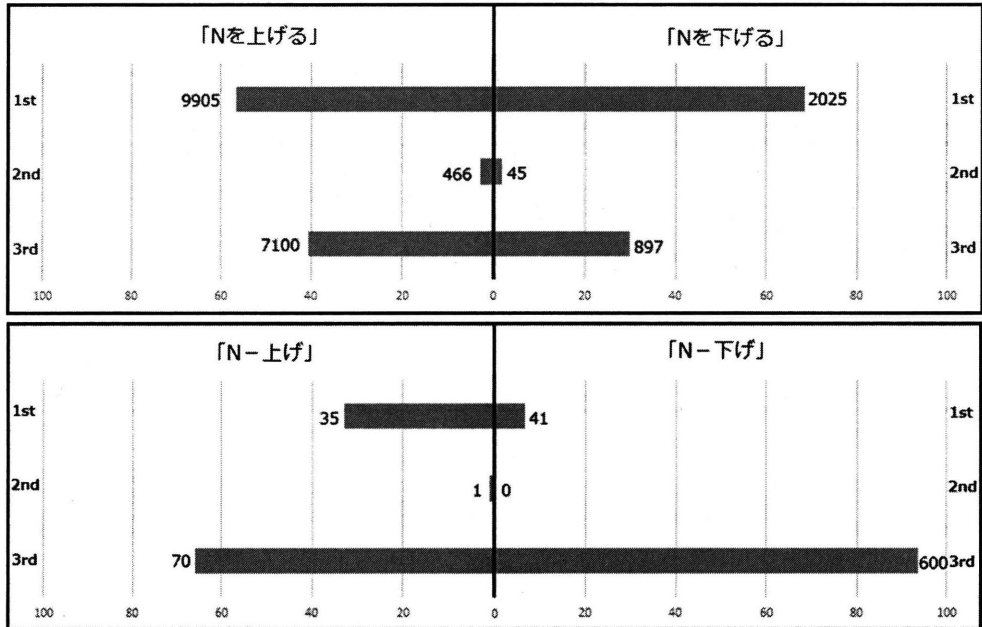
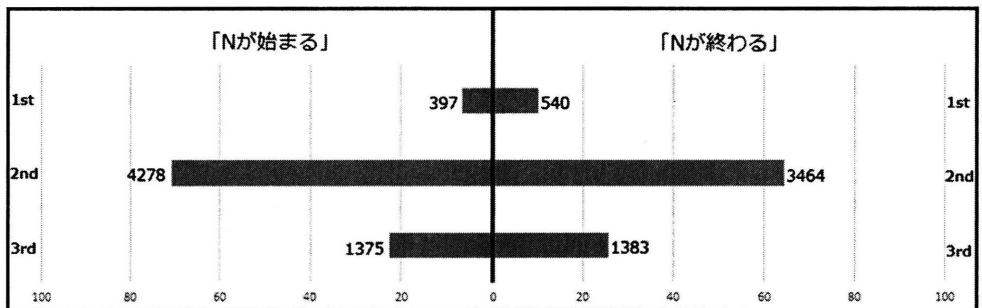


図4 「上げる」と「下げる」の対称性の変化

「上げる」と「下げる」は単独用法時に具体的なものを表す名詞と共起する場合が最も多く、複合語になると抽象的な概念を表す名詞との共起が最も多くなる点で共通している。しかし、「下げる」のほうが大きく変化し、「N-下げ」の場合はそのほとんどが抽象的な概念を低下させることを表すものである (「値下げ」、「格下げ」など)。



反義語における語彙的対称性の破れ

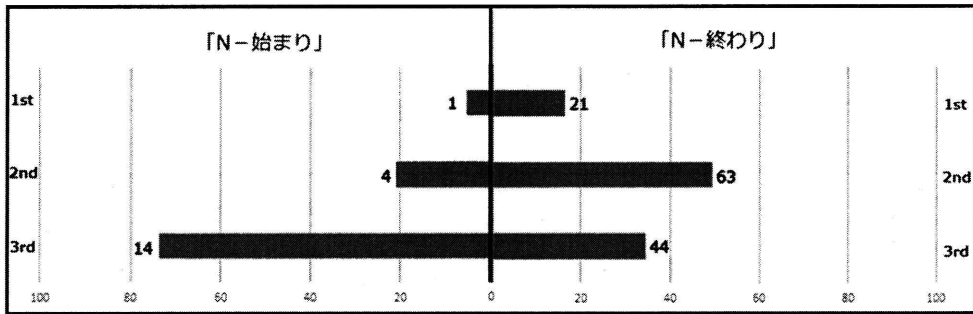


図5 「始まる」と「終わる」の対称性の変化

「Nが始まる」の場合のNは「Nが終わる」の場合と同様に、事象や状態を表すものが最も多かったが、「N-始まり」になると、抽象的な概念のほうが多くなる（「日曜始まり」、「定時始まり」など）。

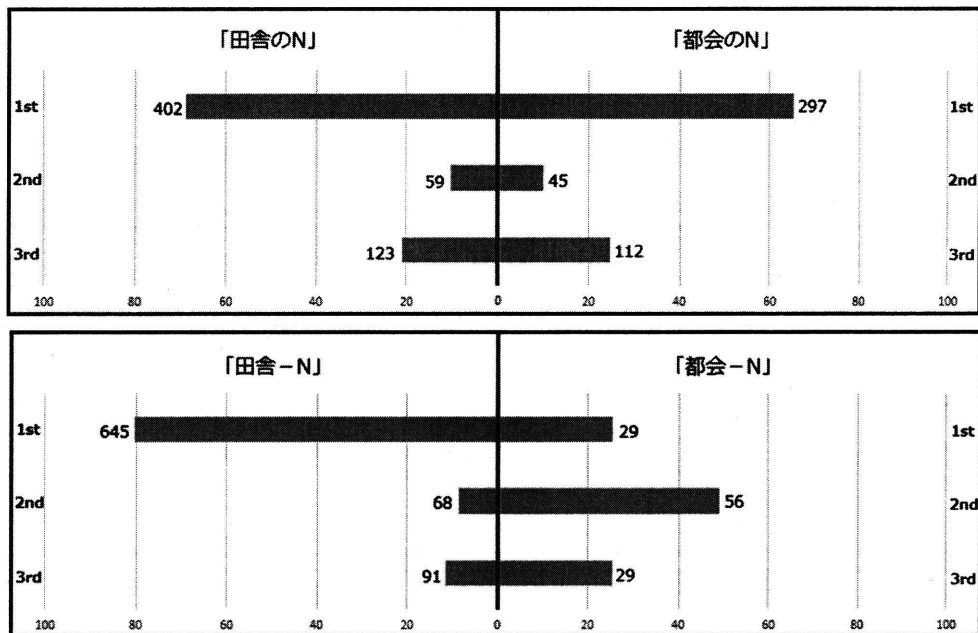


図6 「田舎」と「都会」の対称性の変化

「田舎」と「都会」も単独用法のときは対称的だが、複合語になると「都会-N」の用法パターンが大きく変化する。「都会」は単独用法時「都会の人」のように、Nが具体的なものを表す場合が最も多かったが、複合語用法では事象や状態を表すものが最も多い（「都会育ち」、「都会生まれ」など）。

以上のように、コーパス調査の結果は語彙的対称性の破れの原則を支持している。

語彙的対称性の破れの原則に関して 1 つ問題となるのは、この原則が反義語以外にも適用されるかどうか、ということである。本研究は反義語以外においては、複合語に組み込まれると、明らかに対称性が増すものがあるため、この原則を反義語に限定する。複合語の一部になると対称性が増す例として、例えば、有生物名詞と無生物名詞のペアがある。

- (8) a. 子供が笑っている。／警察が見張っている。(有生物)
 b. ?草が笑っている。／?石が見張っている。(無生物)

(8) のように、有生物名詞は動作主を表すことができるのに対し、通常無生物名詞は動作主になれない。⁶ しかし、複合語に埋め込まれると (9) のように、有生物名詞も無生物名詞も動作主を表すことができない。

- (9) a. 「*子供笑い」、「*警察見張り」 (「*人走り」「*犬吠え」など)
 b. 「*草笑い」、「*石見張り」 (「*葉走り」「*風吠え」など)

一部「神隠し」、「虫食い」のような例が存在するが、複合語 N-V においては基本的に動作主を表す N を許さないという制約がある (影山 1993 の複合語における直接項の制約を参照)。

有生名詞と無生名詞は単独用法では一方が動作主になることができ、もう一方がなれないという非対称性が見られる。しかし、複合語の一部になると、両者ともに動作主になれないという対称的な現象が見られる。このように、反義語以外においては複合語に埋め込まれるとむしろ対称性が増す現象がある。

類義語の場合も同様で、語種の違いによって、複合語を作れるかどうかが異なってくる。例えば和語の「売る」は「売りもの」「売り場」のように、多くの複合語を構成することができるが、類義語である漢語の「売却(する)」は「*売却もの」「*売却場」のように複合語を作ることが難しい。また、同じ語種であっても、類義語は単独用法ですでに対称性が低いことが多いため、複合語になっても対称性が低下するとは限らない。

4. 拘束意味と語彙化

4.1. 拘束意味

では、なぜ語彙的対称性の破れが生じるのだろうか。1 つの要因は「拘束意味」という概念から説明できる。拘束意味とは複合語に埋め込まれた形でしか見られない意味のことである (Booij 2010)。例えば、複合動詞の「見落とす」「聞き落とす」における V2「落とす」は本動詞には見られない<(情報を) とらえることに失敗する>という意味を持つ (cf. 「重要な問題を {見落とした／*落とした}」)。同様に、「焼き上げる」「書き上げる」などにお

ける V2「上げる」の<完成させる>という意味や、「飛び出す」「流れ出す」などにおける V2「出す」の<障害と感じられるような境界を越えて外側に出る>という意味 (松本 2009 を参照) は、単独動詞では見られない拘束意味である。

「V－損」における「損」の意味も拘束意味であり、単なる<不利益>ではなく、<ある行為の見返りとして得られるはずだった利益を、得ることができずに、逆に不利益を被ること>という意味を表している。

(10) というのも、専業主婦がパート年収で所得税非課税限度枠を超えてしまうと、社会保険や配偶者手当てなどの面でも、“働き損”になるからである。

(BCCWJ 島田晴雄・渡部昇一 『日本の論点』、例文の下線は全て筆者によるもの)

(11) 手術を待っている間に進行してしまい、手術ができなくなってしまう患者さんの多くは実は手術を急いでやっても、完治は難しい患者さんが、ほとんどなのです。ですから患者さんを数か月待たせることは、切っても治らない、切られ損になってしまう患者さんをフルイにかけているのと同じことになるのです。

(BCCWJ 土屋繁裕 『このガン切るべきか、切らざるべきか』)

(10) と (11) の例のように、「～損」という表現は、本来働いたらその見返りとして利益を得られるはずであったが、逆に不利益を被る羽目になることや、本来手術することで病気が治るはずだったが、手術しても治らずに単に手術のダメージや手術代という不利益を受けることに用いられている。「～損」はこのような特殊な拘束意味を持っているため、賭け事に負けたり、誰かに騙されたりすると損失が生じるが、ある行為の見返りの代わりに生じた不利益ではないため、「*負け損」や「*騙され損」は存在しない。

一方、「V－得」における「得」は<本来何らかのリスクを伴うある行為が、自ら大きな不利益を負うことなく行使でき、その結果として利益を得ること>を表す。

(12) あるいは栃木の暴力団のケースでいいますと、主犯人が執行猶予付きの懲役、他は十万円以下の罰金、そしてもうけは一千万円。これではやり得なんですね。

(BCCWJ 『国会会議録』)

(13) 小さく記事にしておくのはいい。その当て逃げ犯人が主婦殺しの本ボシである可能性はゼロではないし、この業界には「書き得」という言葉だってある。

(BCCWJ 横山秀夫 『動機』)

(12) や (13) のように、「V－得」は、ある行為の結果得られる利益に対して、そのリスクがあまりに小さい場合に用いられている。

このような拘束意味の制限によって、「V-得」のVは能動的な行為に限られ、受身形を取れないのである（拘束意味の制限によって、能動的な行為でもかなり限定されたものとしか共起できない）。

4.2. 語彙化

語彙的対称性の破れが生じるもう1つの要因は、「語彙化」という現象によるものだと考えられる。ある概念が語彙化されるには、それが当該文化のコミュニケーションにおいて、重要なものである必要がある（Enfield 2015）。ある語が存在するには、コミュニケーション上の動機付けが必要不可欠である。

そのため、反義語ペアはコミュニケーション上重要かどうか、という基準によって、複合語として語彙化されるかどうかという差が生まれる。3節で取り上げた「*暮らし終わる」が存在しないのは、文法的な制限によるものではなく、生活期間が終了したという動的なプロセスが、動詞として語彙化するほどコミュニケーション上重要なものではないからだといえる。「*住み終わる」「*目立ち終わる」「*気付き終える」「*増え終わる」「*崩れ終わる」などが存在しないのも全て語彙化の制限によるものだと考えられる。

3節では「N-売り」と「N-買い」について、トークン頻度に基づいて検討したが、語彙化という現象を検討するためには、タイプ頻度から見る必要がある。表6のように、BCCWJにおける「N-売り」の54.65%は「花売り」や「菓売り」など、複合語全体である行為者を表すものである。それに対して、行為者を表す「N-買い」は全体の2.25%しかない。あるものを販売する人は、その人がどのような人なのかを示す特定性が高く、コミュニケーション上価値があるため語彙化される。反対に、あるものを購入する人は通常特定性が低いいため語彙化されにくい（例：「花売り」／「*花買い」）。

表6 「N-売り」と「N-買い」の意味分類

Nの意味と 全体の意味	「N-売り」全258語		「N-買い」全133語	
	タイプ頻度 の比率	例	タイプ頻度 の比率	例
N：様態 全体：行為	26.74%	「セット売り」	63.15%	「大人買い」
N：原因 全体：行為	2.71%	「失望売り」	3.75%	「衝動買い」
N：対象 全体：行為	9.68%	「円売り」	30.82%	「ドル買い」
N：対象 全体：行為者	54.65%	「花売り」	2.25%	「人買い」

反義語における語彙的対称性の破れ

N：場所 全体：行為	6.2%	「店売り」	0	なし
---------------	------	-------	---	----

また、どのような場所で商品売るのか、というのは販売の形式を特徴付ける重要な情報であるため、「店売り」や「駅売り」などのような複合語が存在する。反対に、どのような場所で商品を買うのかは、購入の形式を決定する情報ではない。そのため、「N－買い」においては、「*店買い」や「*駅買い」のような、Nが場所を表すものは存在しない。このような語彙化による制限は、従来の構造意味論ではうまくとらえることができないものであり、「コミュニケーションツールとしての言語」という観点の導入が必要である。

以上見てきたような拘束意味と語彙化の現象は、ある語の用法パターンを変化させるものだが、その変化の方向性は個々の語の意味によってバラバラで、一般的な傾向を見出すことはできない。そのため、元々対称性の低い2つの語のペアだと、複合語に埋め込まれると対称性が低くなる場合もあれば、逆に高くなる場合もある。それに対して、典型的な反義語のような、単独用法において対称性の高い語のペアだと、複合語に埋め込まれることで、それぞれの用法パターンがランダムに変化しても、対称性はほとんどの場合において下がることが予測できる。このように、反義語が複合語に埋め込まれた際に起こる語彙的対称性の破れは、ある意味必然的な結果だといえる。

5. 結論

本研究が提案した語彙的対称性の破れという原則は、単に反義語に見られる言語現象を説明するだけのものではない。この原則は複合語を用いることで反義語の違いを浮き彫りにすることができるという、反義語研究に新たな視点を提供するものでもある。

語彙的対称性の破れの原則は日本語の複合語だけに適用されるものではないと考えられる。今後の課題としては、ほかの言語の複合語を検証することで、この原則が言語一般の原則であることを示す必要がある。

註

- 1 単独用法では「買う」「借りる」のほうが「売る」「貸す」より用例が多い。
- 2 0~2.0：低い、2.0~3.0：やや高い、3.0~3.5：かなり高い、3.5~4.0：非常に高い（松本 2007b: 185）。
- 3 複合語形式には[[]-X]と[X-[]]があるが、タイプ頻度の高いほうを対象とする。
- 4 この中で、「名詞N+で+ {売る／買う}」に関しては、この形式が場所、様態、原因という複数の機能を表すことができるため、手作業で用例を分類した。
- 5 この場合は「花売り」のように、複合語全体で、ある行為（花を売る）を行う行為者を表す例を指す。
- 6 擬人的な用法でなら容認可能となる。

参考文献

- Booij, Geert. 2010. *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William, and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, D. Alan. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Enfield, Nick J. 2015. *The Utility of Meaning: What Words Mean and Why*. Oxford: Oxford University Press.
- Jones, Steven. 2002. *Antonymy: A Corpus-based Perspective*. London: Routledge.
- Justeson, John S, and Slava M. Katz. 1991. Co-occurrences of antonymous adjectives and their contexts. *Computational Linguistics* 17, 1-19.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房.
- Leech, Geoffrey N. 1974. *Semantics*. Harmondsworth: Penguin.
- Lyons, John. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 松本曜. 2007a. 「英語反義語の認知意味論的考察」『神戸言語学論叢』5, 125-130.
- 松本曜. 2007b. 「反義性に関する認知意味論的考察」『日本言語学会第 135 回大会予稿集』, 184-189.
- 松本曜. 2009. 「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』 175-194, 東京：くろしお出版.
- Mettinger, Arthur. 1994. *Aspects of Semantic Opposition in English*. Oxford: Clarendon Press.
- Paradis, Carita. 2001. Adjectives and boundedness. *Cognitive Linguistics* 12, 47-64.
- Paradis, Carita. 2005. Ontologies and construals in lexical semantics. *Axiomathes* 15, 541-573.
- Paradis, Carita, Simone Löhndorf, Joost van de Weijer, and Caroline Willners. 2015. Semantic profiles of antonymic adjectives in discourse. *Linguistics* 53(1), 153-191.